

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Solidarity through Passion : An Analysis of Biblical Allusions in Edith Sitwell's "Still Falls the Rain"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西川, 健誠, NISHIKAWA, Kensei メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1977

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



受難における連帯： Edith Sitwell, “Still Falls the Rain” における聖書的引喩

西川 健誠

はじめに

「文学においては古典主義、政治においては王党派、宗教においてはアングロ・カトリック」という T・S・エリオット (T. S. Eliot, 1888-1965) の発言のうち、最後の「宗教においてはアングロ・カトリック」という言葉は、一モダニスト詩人の宗教への傾斜を端的に伝えていよう¹。事実、1927 年の改宗以降、かれは『聖灰水曜日』 (*Ash Wednesday*, 1927)、『四つの四重奏』 (*Four Quartets*, 1944) 等、宗教色の濃い作品を書いている。

女性のモダニズム詩人として時にエリオットと並べられるものの、彼に比べると論じられることはごく少ない、と言われるイーディス・シットウェル (Edith Sitwell, 1892-1969) である²。その彼女にも同種の宗教への傾斜が見られる³。シットウェルがローマ・カトリックに改宗するのは 1955 年であるが、彼女の宗教への傾斜はもっと早くから作品中に見て取れる。前期の実験的作風から後期の作風への過渡期の作といえる「黄金海岸の奇習」 (“Gold Coast Customs”, 1929) においてすでに、また原子爆弾投下をテーマにした「原子時代の三篇の詩」 (“Three Poems of the Atomic Age”, 1948) ではよりはっきり、詩人は富者による貧者の搾取、核兵器といった二十世紀の社会の問題に、時に聖書への引喩を織り交ぜることで宗教的な角度から向き合っている。

この小論では、そのような聖書への引喩を織り込みつつ社会問題を扱ったシットウェルの作品の中から「なお雨は降る」 (“Still Falls the Rain” [1941]) を扱ってみたい。パウラ (C. M. Bowra, 1898-1971) により「これまで第二次大戦について英語で書かれた詩の中で最も深遠で感動的と呼ばれるに足るもの」

¹ T. S. Eliot, preface to *For Lancelot Andrewes* (1929. Faber Covered Edition, 1970), p.7.

² 星野徹訳編『イーディス・シットウェル詩集』(思潮社、1993)、百六十九-七十一頁参照。

³ 改宗以前からのシットウェルの宗教性は、神学者(例えばダーシー師[Fr. Martin D’Arcy, SJ, 1888-1976])・批評家(例えばケネス・クラーク[Kenneth Clark, 1903-83])らの認める所であり、彼女自身もこのような評価をされていることを了としていたという。Victoria Glendinning, *Edith Sitwell: A Unicorn Among Lions* (Oxford University Press, 1983), p.315

と評されたこの詩は、1940年のドイツ軍によるロンドン空爆を扱ったものである⁴。空爆という無数の市民にとっての受難にイエスの受難を重ねながら、詩人は、イエスの受難が人間の贖い・再生に繋がったように、空爆が文明の贖い・再生に繋がるよう祈願している。このこと自体、詩人の宗教性を感じさせるが、それにもましてシットウエルの祈願について印象的なのは、再生の対象を万人救済的に無限に広げている点である。以下では、作品の中に密に織り込まれている聖書への引喩の有り様に注目しながら、シットウエルの宗教性の特徴を考えてみたい。

1. 空爆という十字架

この詩は、夜のロンドンの街に投下される爆弾を降り注ぐ雨に喩える所から始まる。

Still falls the Rain—

Dark as the world of man, black as our loss—

Blind as the nineteen hundred and forty nails

Upon the Cross.

(なお雨は降る。

人の世と同じく暗く、私たちの喪失と同じく暗く、

十字架上の千九百四十本の釘と

同じく盲目に)⁵

詩人は、この詩全体を通してのリフレインである「なお雨は降る」(“Still falls the rain”[1.1]) という句にすぐに続け、抽象的なものを vehicle にし具象的なものを tenor にした直喩を用いている。これにより、空爆という目に見える事態を、罪の結果としての受難、そして究極的には受難により実現することを詩人が祈願する救済、という形而上的問題に結びつけているのである。詩人によれば投下される爆弾は「人の世と同じく暗く、私たちの喪失と同じく黒く、十字架上の千九百四十本の釘の様と同じく盲目」だという。三つ並ぶ直喩のうち、イエスの十字架刑に言及している最後のもの(“Blind as the nineteen hundred and forty nails / Upon the Cross”[11.2-3]) が特に印象的である。紀元1世紀にイエスの受難を引き起こしたのと同じ人間の倫理的盲目さが、

⁴ C. M. Bowra, *Edith Sitwell* (Haskell House Publishers, 1975), p.35.

⁵ シットウエルの詩作品からの引用は *Edith Sitwell: Collected Poems* (Duckworth Overlook, 2006) による。訳文は全て西川のもの。

1940年に無差別空爆という禍事をもたらしている、ゆえに「なお」苦難の雨が降る(“*Still falls the rain*” [強調は西川])、というわけだ。禍事の歴史的現存性が伝えられている箇所である。*loss/Cross* という押韻も、この禍事と苦難＝十字架の繋がりを印象づけよう。だが同時に、こうして空爆にさらされる都市ないしは都市の住民を十字架上のイエスに重ねることで、詩人は、この詩の後半でより明確な形で語られる救済の契機としての受難という発想の伏線を、張っているともいえる。

2. ユダ、祭司長たち、カイン(『マタイによる福音書』27章、『創世記』4章)

第一連の直喩が視覚に関わるものだったのに対し、第二連のそれは聴覚に関わるものに変化している。前連で空爆にイエスの受難を見た詩人は、第二連・第三連では受難に先立つユダの——というよりはその向こうに祭司・律法学者らの——裏切りに思いを向けている。

Still falls the Rain

With a sound like the pulse of the heart that is changed to
the hammer beat

In the Potter's Field, and the sound of the impious feet

On the Tomb:

Still falls the Rain

In the Field of Blood where the small hopes breed and the human brain
Nurtures its greed, that worm with the brow of Cain.

(なお雨は降る。

人の心臓の鼓動でありながら
「陶工の園」で鳴る金鎚の音と
化した音、あの墓の上を歩く

不敬な者の足音のように。

なお雨は降る。

小心翼翼とした希望が生まれ、
人の頭がその食欲さを、
カインの額をもったあの虫を育む、「血の畑」に。)

「陶工の園」(“the Potter's Field”)、「血の畑」(“the Field of Blood”)はいずれも『マタイによる福音書』27章に由来する句である。同箇所によれば、イエ

スの身柄を引き渡した報酬として銀貨 30 枚を得たユダは、後悔の念に駆られこの銀貨を祭司長に返そうとする。が、祭司長たちは取り合わず、その後ユダは銀貨を神殿に投げ入れた後自殺した。ユダの献金を血に汚れた金と考えた祭司長らは、陶工の所有していた土地をその銀貨で購入して共同墓地とし、以後「血の畑」と呼ばれた、という。詩人は空爆にさらされ犠牲者が出るロンドンの街をその墓地に見立て、落下する爆弾の音をその墓地に埋められる棺に蓋をする金槌の音、墓の上を無遠慮に歩き回る者の足音に喩えているのである⁶。空爆という形で同じ人間を棺に閉じ込める者は、同時に人間の死を不敬に (cf. “impious” [l.7]) しか扱わぬことが、(the hammer) beat / (the impious) feet という脚韻により伝えられている。

ところで引喩の vehicle のレベルにおいて、「墓」の上を歩くという「不敬な足」の持ち主は誰になるか。ユダ、と解する解釈がある⁷。その解釈では impious を「(イエスに対し)裏切りの姿勢を取った」と解し、かつ大文字で記されている「墓」(“the Tomb”[l.4]) をイエスの墓、と理解するのであろう。また、報酬目当ての貪りをユダの裏切りの動機と見、これを『創世記』第四章中で人類最初の殺人者として描かれるカインと結びつける (cf. “the human brain /Nurtures its greed, that worm with the brow of Cain”[ll.9-10]) という見立ては、『黄金海岸の奇習』の中でユダとカインを並べた (“Rich man Judas, Brother Cain”[Gold Coast Customs, ll. 396-397]) 同じ詩人の見立てを思い起こさせることも、この解釈を支えよう。とはいえ、聖書内の記述の順番に従う限りユダの自殺の方がイエスの刑死に先んじていることを鑑みれば、イエスの墓をユダが歩くことはありえない。かつ後述する通りこの詩の第五連においてユダは同情的に描かれることになる。そこで私は「墓」をユダの墓と解し、その上を闊歩する「不敬な足」を祭司長達のもの、と読んでみたい。この解釈を取れば、空爆を人間の罪の結果と描くにあたり、詩人が、ユダの罪よりもユダを唆しながらかれを利用した後はかれを冷たく突き放した祭司長達の罪に、根源的類似を認めていることになろう。戦争の原因を平凡な市民よりはむしろ指導者層に求めている。

⁶ “Still falls the Rain” を収めたのと同じ詩集中で同詩集のタイトルピースである “Street Song” 中に “The Pulse that beats in the heart is changed to the hammer / That sounds in the Potter’s Field where they build a new world / From our bone…” (胸の中で打つ鼓動は／「陶工の園」でたてられる金槌の音に変えられる／私たちの骨から新たな世界を造るような) という一節がある。この指摘は安藤一郎・高村勝治『英米現代詩の鑑賞』(研究社、1954)、pp.176-7 に負う。訳分は西川

⁷ 例えば寺澤京子「イーディス・シットウェルの「なお雨は降る」—Metaphor and Metonymy」(神戸英米学会編『神戸英米論叢』第 21 号[2007])、p.19。この点の相違にも関わらず、細部の読み、また他のシットウェル作品とのクロス・レファレンスの点で、この寺澤論文に教えられる所があった。注 9、注 13 参照。

そして弟子を師から離反させた祭司長の振舞い、それと重なる、同胞と同胞を相食ませるがごとき二十世紀の指導者層の振舞い、その原型となる人類最初の殺人が、いずれもその根本において「思い」＝頭脳による罪であることが *Rain/brain/Cain* という脚韻により印象づけられている。

3. 金持ちとラザロ（『ルカによる福音書』16章）

ここまで「十字架」という形で間接的に言及されてきたイエスは、第四連になると「キリスト」と詩人によりはっきり名指され、祈願を向けられている。宗教色が濃いこの作品においても、この連は特に詩の言語が典礼の言語に近づいている。“Christ...have mercy on us”という句は、ミサにおけるキリエ（求憐唱）の語句を引いたものである。かつ「キリスト」の後に「毎日、毎夜が十字架に釘付ける」（“that each day, each night, nails there”[l.10]）という関係節が続く⁸。これは一義的には毎日毎夜ロンドンが空襲に晒されていることを指した表現である。が同時に神学的には「犠牲の反復」というカトリック的概念（イエスの犠牲はミサの度ごとに反復される、という考え方）を思わせる。後年ローマ・カトリックに改宗することになる詩人は、繰返される空爆の中に、繰返し犯し続けられる人の罪とその結果としてのイエスの受難の反復を見つつ、そこに救済の願いをも抱いているのである。

Still falls the Rain

At the feet of the Starved Man hung upon the Cross.

Christ that each day, each night, nails there, have mercy on us—

On Dives and on Lazarus:

Under the Rain the sore and the gold are as one.

（なお雨は降る、

十字架にかけられた「飢えた人」の足元に。

毎日、毎夜が十字架につけるキリストよ、

我らを憐れみたまえ。

金持ちもラザロも。

砲火の雨の下では、擦り傷も黄金も同じものとなる）

十字架上のイエスを指し「飢えた人」（“the Starved Man”[l.12]）という呼称が用いられているのが目を引く。聖書中にイエスをこの呼称の通り呼んでい

⁸ 安藤・高村氏は each day, each night を副詞句、nails については臨時的に受身的意味を伝える自動詞と解している（安藤・高村、上掲書、p.177）。しかし each day, each night を nails という他動詞の主語ととっても差し支えないのではないかと。

る箇所はない。ただし『マタイによる福音書』25章に、最後の審判につき、イエス自身が、天に信仰者が入れられるか否かは「わたしの兄弟であるこの最も小さい者」が「飢えている時に食べさせ、のどが渴いていた時に飲ませ」たか否かにかかる、と述べ、自らを飢える者、乾ける者に重ねた箇所がある[31-46節]。前連でイエスを刑死に追いやった祭司長らに「貪欲」(“greed”[l.11])の罪を見て取った詩人は、恐らく聖書の同箇所を意識しながら、イエスの受難と重なる空爆下の市民の受難——食料不足を含む——の原因を、人間の経済的・社会的同胞意識の欠如に求めているのだ⁹

だが他方で、詩人はイエスに対し、憐れみを「私たち—金持ちとラザロ双方の上に」(“on us—/On Dives and on Lazarus”[ll.13-14])かけるよう祈願している点にも注目したい。「金持ちとラザロ」とは言うまでもなく『ルカによる福音書』16章中のイエスの譬え話中の人物である。その譬え話では、生きている間おこぼれにも与れず全身出来物に覆われたラザロは死後天に召され、ラザロの飢えを無視し飽くまでの贅沢を楽しんだ金持ちは地獄に落とされる。同じ箇所への引喩は、『黄金海岸の奇習』の最終行、まるで第二次大戦を予言したかのような数行にも登場するのだが¹⁰、この詩において詩人は一歩進んで、ラザロのみならず金持ちにも憐れみが下るよう祈願しているのである。その理由は第一に、詩人が空爆の無差別性を意識しているからだろう。貧富に関係なく誰でも爆弾の犠牲になる以上、文字通り「この雨の下、ラザロの腫れ傷も金持ちの黄金も同様になる」(“Under the Rain the sore and the gold are as one”[l.15])。と同時に、ラザロと同様、いやラザロ以上に、金持ちは救済を必要としていると考えていることも、理由ではないだろうか。貪りという根源的な罪の解決がない限り、平和もまた有り得ないという認識が、詩人にはあるように思える。

⁹ シットウェルは自伝 *Taken Care of* の最終章で、ハリウッドでの要件のためにロサンゼルスを訪れた際、ロサンゼルスのスラム街でホームレスの人々を目にして“Every time I see a poor man, I see the Starved Man on the Cross”という感想を記している。Edith Sitwell, *Taken Care of* (Hutchinson of London, 1965) p.186. なおこの指摘は寺澤、上掲論文、p.21に負う。

¹⁰ “Yet the time will come / To the heart’s dark slum /When the rich man’s gold and the rich man’s wheat / Will grow in the street, that the starved may eat,—/And the sea of the rich will give up its dead —/And the last blood and fire from my side will be shed. /For the fires of God go marching on.” (「やがてこういう時が来るであろう/この暗い心臓のスラム街にも/金持ちの金と金持ちの麦が/この街に育ち、飢えた者たちが食べられるようになる時が/金持ちの海がその死者を手放し/私の脇腹から最後の血と炎が流れる時が/というのも神の炎はたえず前進し続けるものだからだ」)

4. 脇腹から流れ出る血（『ヨハネによる福音書』19章）

第一連から「十字架」という語を通じ詩中で一貫してイエスの受難に言及される中、「なお降る雨」という句は投下される爆弾のみならず、爆弾の犠牲者が苦しみ流す血、また受難のイエスが流す血、をも指す語として機能してきた。「なお雨は降る」（“Still falls the Rain”[l.16]）という連冒頭のリフレインが次行で「なお血は滴る、『飢える人』の傷ついた脇腹から」（“Still falls the Blood from the Starved Man’s wounded Side”[l.17]）と書き直される第五連においては、十字架上のイエスの血への言及がより明確になる。「傷ついた脇腹から」とは『ヨハネによる福音書』19章34節（「兵士の一人が槍でイエスの脇腹を刺した一すると、すぐ血と水が流れた」）を踏まえた表現だ。雨のように降り注ぐ爆弾を爆弾の犠牲者が流す血に、さらにイエスによる贖いの血に見立てる詩人のコンシートは、グロテスクとはいえ、苦難がそのまま救いの契機になるというキリスト教的逆説を伝えるには効果的である。

Still falls the Rain—

Still falls the Blood from the Starved Man’s wounded Side:

He bears in His Heart all wounds,—those of the light that died,

The last faint spark

In the self-murdered heart, the wounds of the sad uncomprehending dark,

The wounds of the baited bear,—

The blind and weeping bear whom the keepers beat

On his helpless flesh...the tears of the hunted hare.

（なお雨は降る。

「飢えたる人」の脇腹から絶えず血が滴る。

その人は胸の中であらゆる傷を負う—

光を失ってしまった者の傷、

自らを殺めた者の心の中の

最後のか弱い閃光、自分を包み込んでくれぬ悲しい

闇ゆえの傷、

熊いじめの熊のかかえる傷、

抵抗できぬのに飼い主が叩きつづける、盲目の、涙を流す—狩で

追い詰められた兎の流す涙を流す—熊の傷を。）

爆弾の形で流されるイエスの血は誰を贖うのか？考えられる答えの一つはユダである。すでに第二連でユダの裏切りの背後により本質的な罪として為政者・祭司長たちの残忍さを見て取り、その犠牲者としてユダを捉えていた詩

人は、この連ではっきりとユダを救済の対象にしている。「飢えたる人」はその胸にあらゆる傷、「自ら殺めた心の中の最後のか弱い閃光」(“The last faint spark / In the self-murdered heart”[ll.19-20])の傷、「自分を包みこんではくれない悲しい闇ゆえの傷」(“the wounds of the sad uncomprehending dark”[l.21])を負う、というが、これは絶望の闇の中で自殺したユダへの言及であろう。続く数行でユダは飼い主に容赦なく打たれる「熊いじめの熊」(“the baited bear”[l.22])、さらには「狩りの兎」(“the hunted hare”[l.23])に喩えられている。いずれも頭韻を踏み、かつ相互に押韻する(bear/hare)これらの句から浮かびあがる詩人のユダ像は、自らの意志で行動する極悪人というよりは、強者に翻弄される無防備な弱者のそれだ¹¹。そんな、卑怯かもしれぬが弱い者の傷(“wounds”[l.23, l.25])にイエスの傷口(cf. “wounded”[l.22])からの血は流れる、というのが、この詩行から窺われる詩人の救済観なのである。

と同時に、詩人はユダの姿に人類そのものの姿を重ねてもいる。倫理的蒙昧ゆえにイエスの愛の教えを理解出来なかった(cf. “uncomprehending” [l.24]。この語には『ヨハネによる福音書』1章5節「暗闇は光を理解しなかった」[欽定訳では “[T]he darkness comprehended it (=the light) not”とある])のエコーを認めたい人類は、戦争により互いを殺しあう、いわば類のレベルでの自殺に陥った。「自殺」という点でユダと人類は重なる。また投下される爆弾は、炸裂し閃光を放ってから(cf. “the last faint spark”[l.23])被弾した者の生命を奪う。こんな形で亡くなっていく人間達こそ、贖いの対象とされる、と詩人は考えているのである。そしてユダに対するのと同じ視線を空爆下の市民に注いでいるとすれば、詩人はかれらを、敵への憎悪感情に駆られる点で「愚か」(cf. “blind”[l.27])かもしれぬが、攻撃にさらされ「無力」(“helpless”[l.28])な、憐れみを受けてしかるべき存在と見ていることになろう。事実彼らは絶えず敵軍により「狩られ」(“hunted”[l.28])、爆弾により「叩かれ」(cf. “beat”[l.27])ている。市民にこうして血を流させる爆弾の雨は、だが、詩人によりイエスの血に実質変化させられ、逆説的にかれらの贖いになる。

5. 正しい者にも正しくない者にも降る「雨」(『マタイによる福音書』5章)

「狩られる」「叩かれる」者たち、という言い方は、確かにかれらと「狩る」「叩く」者たちとの間の線引きを示唆する。では詩人の考える贖いは「狩られ」「叩かれ」者たちにしか及ばないのであろうか。第六連で与えられる詩人のこの問いに対する答えは、否である。

¹¹ このあたりの数行は、頭韻・脚韻に加え母音韻(特に[i:] [e]の繰返し。The wounds of the baited bear / The blind and weeping bear whom the keepers beat / On his helpless flesh...)による音声効果が顕著な箇所である。安藤・高村、上掲書、p.179

Still falls the Rain—

Then—O Ile leape up to my God; who pulles me doune—

See, see where Christ’s blood streames in the firmament:

It flows from the Brow we nailed upon the tree

Deep to the dying, to the thirsting heart

That holds the fires of the world,—dark-smirched with pain

As Caesar’s laurel crown.

(なお雨は降る。

そして—「私はわが神へと飛び上がりたい。誰だ、私を引き落とすのは。

ああ、キリストの血が蒼穹に流れる」

その血の流れは私たちが十字架にかけた人の額から

瀕死の、乾いた心へと深く流れる。

この世の火を握る者の—カエサルの月桂冠の様に痛みで

黒く汚れた者の心へ。)

本連二・三行目は、クリストファー・マーロー(Christopher Marlowe,1564-93)作『ファウストス博士』(*Doctor Faustus*)の最終場面(Act 5, Scene 2)、二十四年間我意の限りを尽くした後、メフィストフェレスとの契約通り地獄に落とされるファウストスの台詞からの引用である¹²。上の引用箇所直後に「一滴、いや半滴の血がわが魂を救うのに」(“One drop would save my soul, half a drop”)という一文が続くのだが、would という仮定法が示す通りファウストスが救世主の血によって贖われることはない。しかしシットウエルのこの詩においては、贖いの血は「この世の火を握る者の、瀕死の、乾いた心」(“the dying...the thirsting heart / That holds the fires of the world”[ll.28-9])に注ぎ込む、しかもその心は「カエサルの月桂冠の様に、痛みで黒く汚れて」(“dark-smirched with pain / As Caesar’s laurel crown”[ll.29-30])いる、と記されている。「火を握る者」という表現からは火を用いた人々を火責めにする兵器をつくる科学者が、また「カエサルの月桂冠のごとく」という表現からは戦争を企てる権力を持った政治家が想像されよう。第四連でラザロと金持ちとの双方にイエスの憐れみが注がれるよう祈願した詩人は、これら力ある、

¹² *Doctor Faustus* には A-text [1604]、B text [1614] の二種のテキストがある。シットウエルが依拠しているのは A-text であろう。B-text には彼女が引用している二行のうち、後半の一行がない。前半の一行はいずれのテキストでも、“O I’ll leap up to God! who pulls me down?” と who 以下が疑問文であることが明確になっている。David Bevington and Eric Rasmussen (ed), *Christopher Marlowe: Doctor Faustus (A-and B-texts [1604, 1616])* (Manchester: Manchester University Press, 1993), p195, p283.

そして戦争に責任のある者らの贖いも、空襲で流される血によりなされる、と考えているのだ。第二連、第三連まで結びつけて考えれば、ユダを利用して事実上イエス、ユダ共に殺めた祭司長の罪もまた贖われる、ということになる。ここには自らが生み出した禍の犠牲者によって、加害者の側が贖われるという逆説が認められる。そんな言い方が奇矯だとすれば、弱者・強者という線引きを無意味にする空爆の現実を目の前にした詩人は、ここで、その事実が強者・弱者の線引きのない人類全ての贖いの契機になることを念じている、と言い換えたらよいかもかもしれない。「父は...正しい者にも正しくない者にも雨を降らせて下さる」(『マタイによる福音書』5章45節)という聖書の文言の実現を、詩人は空爆下のロンドンに見ているといえる¹³。

6. 救い主の声

第一連から第六連まで一貫して冒頭に「なお雨は降り注ぐ」(“Still falls the rain”)というリフレインが置かれていた。しかし最終連では「雨」の音にイエスの声(“the voice of One”[l.31])が取って代わっている。第二連で爆弾の投下音の中に人類の罪を聞き取っていた詩人は、詩のこの最終部分で同じ投下音の中に、贖罪主本人からの愛の嘉信を耳にしていることになる。

Then sounds the voice of One who like the heart of man
Was once a child who among beasts has lain—

‘Still do I love, still shed my innocent light, my Blood, for thee.’

(するとあの方の声が聞こえる。人の心と同じく、
幼子の時に、獣達の間で寝かされていた、あの方の。

「私はなお愛し、私はなお無垢の光、私の血を、汝のために流す」と)

結びの一行は Still という語を各連のリフレインと共有しながら、同行においても続けて語られているのは、もはや爆弾の雨ではなく「愛」(“love”[l.33])と「光」(“light”[l.33])である。ここにおいて人の悪意から生まれた兵器の閃光が「無垢の光」であり、兵器の雨が「愛」ゆえに流される贖いの「血」であることが、イエスその人の言葉で明かされているわけだ。しかもその言葉が「汝」(“thee”[l.33])と、二人称単数の相手に向けられる形で与えられている点にも注

¹³ この詩についてシットウェル自身が語った言葉の中に「絶えず降る雨は...罪ある者の上にも罪なき者の上にも下る (falling upon guilty and guiltless) という箇所があるが、guilty and guiltless を the just and the unjust と書き換えれば、そのまま『マタイによる福音書』5:45の文言(欽定訳では He [=God]...sendeth rain on the just and on the just)と重なる。Sitwell, *Collected Poems*, p.xli.

目したく思う。「汝」とは、前連でその台詞が引かれていたファウストスとも、あるいはその台詞に自らの祈りを仮託した詩人とも、また空爆を受ける側・加える側の各人とも解しえよう。そのいずれが「汝」であるにせよ、その「汝」とのパーソナルな関係の中でイエスは諭すように語っている。そして語られるのは、空爆という惨禍が、惨禍であるにも関わらず、また歴史を通じ(二度繰り返される“still”は「ずっと」とも「にもかかわらず」とも解せられることに注意されたい)継続される神の贖罪の業たり得る、という希望なのである¹⁴。

まとめ

以上、シットウェル作「なお雨は降る」を聖書への引喩を鍵に読み解いてきた。戦争という事象を、純粹に現実政治的現象と捉えて思想的問題を回避し論じることとも可能である。しかしシットウェルは詩人らしく、それも宗教性をもった詩人らしく、戦争という現象を、歴史を通じて根絶されない人間の根源的な罪の結果と捉え、かつその罪の浄化の場になることを祈念している。「この雨は罰と苦悩、さらに苦悩によるあがないのシムボル」というジョン・レーマンの要約は適切である¹⁵。こういう神学的な戦争の捉え方を詩という形で伝える上で、聖書への引喩は効果的に働いている。

だが私にとってさらに興味深いのは、このような神学的な戦争の捉え方とそれを補強する引喩の仕方が、正統的キリスト教の枠から一見はみ出ているように見える点、しかしそれゆえかえってキリスト教的な救済の観念を万人救済的方向に徹底している点にある。この詩においてシットウェルは、ユダヤ金持ち、悪魔と取引したファウストス等の救済の可能性を、社会の救済とからめてという間接的な形であれ、示唆している。これは一方で正統的な神学の立場から眉を顰められかねない発想である。が、他方でこれは「私は正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来た」(『マルコによる福音書』2章17節)というイエスの言葉を突き詰めたものとも考えられないだろうか。富者・貧者、正義の者・不義の者を等しく犠牲にする現代の戦争の惨禍が、かえって全ての人に等しく経験される「幸いな禍」になるように、と詩人は祈念しているわけだが、これは、受難と受難を超えた先にある復活における

¹⁴ この箇所について、寺澤氏はこの詩のサブタイトルに「夜と暁」(“Night and Dawn”)という句が含まれていることに注意した上で、詩人がキリストを描く視点が「第4連ではキリストの足もと、5連ではわき腹、そして6連ではキリストの額」に上昇しており、これに伴い詩の中の時間が「闇から暁へ移行していく」と指摘している。寺澤、上掲論文、p.24。

¹⁵ ジョン・レーマン著、安田章一郎訳『イーディス・シットウェル』(英文学ハンドブック―「作家と作品」No.19: 研究社、1956)、四十頁。

全ての人の連帯、というキリスト教の最中核の教えを、現在進行形の歴史上の出来事の中にリテラルに追究したものなのである¹⁶。その点にこそシットウエルの宗教性のユニークさが見られるのではないか。

十字架は縦線と横線が交差した所に成立する。詩人にとり空爆は、空中から投下される爆弾の閃光がなす縦線と、地上の人間が無差別＝水平的に犠牲になるゆえに引かれる横線とが交わり出来る十字架であった。と同時に、神から下される人間への愛とその愛ゆえの人間の連帯とが交差する十字架を垣間見させるものでもあった。縦線が可能にするこの連帯の水平線が無限に拡がることを、シットウエルは祈ったのだ。

参考文献

- Sitwell, Edith (2006) *Collected Poems* London: Duckworth Overlook.
 —— (1965) *Taken Care Of: An Autobiography* London: Hutchinson
 ++++++
- Bevington, David and. Rasmussen, Eric (1993) *Christopher Marlowe; Doctor Faustus (A-and, B texts [1604.1616])* Manchester; Manchester University Press 1993
- Bowra, C. M. (1975) *Edith Sitwell* New York: Haskell House Publishers
- Eliot, T.S. (1970) *For Lancelot Andrewes: Essays on Style and Order* (paper covered edition) London: Faber
- Glendinning, Victoria (1981) *Edith Sitwell: A Unicorn Among Lions* Oxford: Oxford University Press
- Lindsay, Jack (1968) *Meeting with Poets* (London: F. Muller)
- 安藤一郎・高村勝治 (1954) 『英米現代詩の鑑賞』(東京、研究社)
- ジョン・レーマン著、安田章一郎訳 (1956) 『イーディス・シットウエル(英文学ハンドブッカー「作家と作品」No.19) (東京、研究社)
- 寺澤京子 (2007) 「イーディス・シットウエルの「なお雨は降る」—Metaphor and Metonymy」(神戸、神戸英米学会編『神戸英米論叢』第21号、17-26)
- 星野徹訳編 (1993) 『イーディス・シットウエル詩集』(東京、思潮社)

¹⁶ マルクストの批評家ジャック・リンゼイ (Jack Lindsay, 1900-90)はこの点をさらにシットウエルのカトリックへの改宗と結びつけ、「キリストはまず彼女の詩において、人類の一体性を伝えるのに必要なイメージとして登場したが、次第に同じイメージを外現実として、彼女の詩の内部のみならず外部にも必要とするようになった」とコメントしている。Jack Lindsay, *Meeting with Poets* (F. Muller, 1968), p84.; quoted in Glendinning, p.314.